

令和 6 年度
北海道立総合博物館協議会
アイヌ民族文化研究センター専門部会
議 事 録

日時：令和 6 年 1 2 月 1 2 日（木） 13 時 30 分開会

場所：北海道博物館 講堂

令和6年度北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会議事録

会議名	令和6年度北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会
開催日時	令和6年12月12日（木）13時30分～15時20分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席者	【委員】 小川哲也委員（部会長）、白石英才委員、藤岡千代美委員、結城幸司委員 以上4名出席 （欠席：関根真紀委員、村木美幸委員） 【事務局】 石森秀三北海道博物館長、墓田裕二文化振興課総括主査兼企画調整係長、 小島圭介アイヌ政策課象徴空間担当課長 ほか
傍聴者	0名
議 題	（1） 令和6年度第1回及び第2回北海道立総合博物館協議会実施報告 （2） 令和5年度アイヌ民族文化研究センター事業実施報告 （3） 令和6年度アイヌ民族文化研究センター事業経過報告（4～11月） （4） 「新たな時代に対応する北海道立総合博物館のあり方について（答申策定に向けた協議の経過について） （5） 北海道博物館 第3期中期目標・計画（素案）について（アイヌ民族文化研究センター事業を中心に） （6） その他

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

1 開会（進行：会田学芸主幹）

2 館長あいさつ

《配付資料の確認》

事務局より配布資料の概要を紹介。

《出席状況の確認》

北海道立総合博物館条例第25条第2項に基づき、委員総数の2分の1以上の出席（6名中4名出席）により、本専門部会が成立していることを確認。

3 北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会委員及び特別委員紹介

《専門部会の公開》

北海道立総合博物館協議会運営要綱第3条に基づき、本専門部会を公開とすることを説明。

《部会長あいさつ》

4 議題（進行：小川部会長）

議題（1）令和6年度第1回及び第2回北海道立総合博物館協議会実施報告

事務局（会田学芸主幹）：事務局から令和6年度第1回北海道立総合博物館協議会の内容について、「資料1 令和6年度第1回北海道立総合博物館協議会議事録」1ページ目の議事概要に沿って報告。

（質疑応答、意見等なし）

議題（2）令和5年度アイヌ民族文化研究センター事業実施報告

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：事務局から令和5年度アイヌ民族文化研究センター事業について「資料2 令和5年度 アイヌ民族文化研究センター事業経過報告」に沿って報告。

白石委員：「資料2」の「資料の収集保存」の「（2）文書・音声資料の公開」に記載されている「資料の公開に向けた関係者との協議（承諾書の受領）2件（これに伴う新規公開資料2件）」という点について、2件の依頼をして、2件承諾ということでしょうか。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：実際にはもう少し多くの方と御相談をしています。その中で、依頼を出すまでに至った方が2人ということです。残りの方は今年度も話を継続しています。

白石委員：相談を進めていく中で、承諾されなかったということはあるのでしょうか。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：ここ2ヵ年に関してはありません。過去を遡っていくと、承諾されなかった事例もあります。

小川部会長：「資料2」の「展示」の「（2）巡回展」で記載されている、美唄市や奥尻町など、アイヌ文化に関する事業が多くはない地域は、市から依頼が来たのでしょうか。もしくは、北海道博物館側から話を持ちかけたのでしょうか。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：美唄市については、市に着任したばかりの学芸

員から、アイヌ文化に関する取り組みがなかなかできないとの相談を受け、美唄のアイヌ語地名を取り上げる巡回展の実施に至りました。

奥尻町については、最終的には先方の学芸員の方から相談を受けましたが、もともとは当館の研究プロジェクトがきっかけです。そこでは、北海道の離島の歴史や生活文化を調べ、その地域の方に研究成果を公開することを、40歳以下の若い世代の学芸員が企画し、奥尻町の調査を進めていました。その中で、アイヌ文化についての展示ができないかという話になり、巡回展の実現に至りました。

小川部会長：議題（5）とも関連しますが、本別町立勇足小学校の校長先生から本別の地名の由来を知りたいと相談された際に、知人の詳しい方を紹介したことがあります。また「ネイパル足寄」の指定管理者であるオカモトグループの方が、その施設に子どもたちが集まるので木彫りの講習をしていただけないかとの相談を受けた際には、幕別町の「マクンベツアイヌ文化伝承保存会」を紹介したことがありました。例えば、このような話をしたい方がいた際に、その窓口として北海道博物館でできることがあるといった情報を発信することはできるのでしょうか。私に相談があれば、求められていることに対してほかの方につなぐことはできるのですが、アイヌに関わる人たちの相談の窓口があった方が良いかとも思います。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：まず、令和7年度以降の巡回展の開催地域はまだ決まっていないので、相談があれば事業としてもできます。

当館には、いろいろな人から問い合わせがあります。ひと昔前は、「〇〇はアイヌ語でなんと言うか」といった内容が多かったのですが、現在はそのくらいであればスマートフォンで調べれば済むような時代になっております。むしろ「学校でしっかりと学習させたい」「町として取り組みをしたい」という取り組みをしたいとなった際に、その相談はそもそもどこに持っていけば良いかということですね。巡回展の話以外にも当館にいくつか相談は来ており、人手が許す限りお手伝いさせていただいております。例えば、長万部町で古い地図が見つかったと相談を受けた際には、その地図にどういった価値や意義があって、保存していくとすればどういった方法があるかということと一緒に考えたりしました。

まずは問い合わせてみていただいて、博物館の事業として取り組めるものがあれば、それを通じて地域のアイヌ文化に対する理解が深まったり、活動に繋がったりするきっかけになれば良いと思っています。

小川部会長：「資料2」の「博物館ネットワーク」は、北海道博物館と国立アイヌ民族博物館の2館と道内の博物館でのネットワークということでしょうか。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：北海道博物館が関わっているネットワークのうち、アイヌ文化に関してお話します。国立アイヌ民族博物館は、ウポポイが中心となり道内や国内のアイヌ文化に関する資料を持っている施設やアイヌ文化の事業に取り組もうとしている施設をつなぐネットワークを作ることが設立時からの大きな使命になっています。それをつくっていく中で、北海道博物館も道立の博物館として、単なる一協力者として以上に少し深く関わらせていただきお手伝いをしております。

そのほかに、北海道全体の博物館をつなぐ北海道博物館協会があり、当館がその事務局になっています。北海道博物館協会としてアイヌ文化の事業に常に取り組んでいるわけではありませんが、道内の博物館でアイヌ文化に関する専門の職員がある程度在籍している施設はあまりないので、博物館協会での情報交換や活動のあり方を考える際に、当館から情報提供を行うといった役割を果たしています。

それから、札幌市厚別区や江別市といった当館の近隣施設をつなぐ「かるちやる net」というネットワークもあります。昨年度には、その関連で厚別図書館からアイヌ文化に関する展示を

実施したいという相談を受け、当館の職員が協力し、図書館の中でアイヌ文化に関する図書展示や、パンフレットの配布などを行う事業に協力したこともありました。

小川部会長：北海道アイヌ協会の理事会の中で結城委員から、北海道博物館やウポポイ、北海道アイヌ協会、アイヌ民族文化財団、北海道大学などの関係する団体の協議会をつくり、アイヌ文化に対する認識の統一性に向けて議論したいという話がありました。日本は世界の中で先住民政策が一番遅れているので、その世界の先住民政策に日本も近づいていくことが目的のひとつです。北海道大学アイヌ・先住民研究センターの加藤博文先生からは、北欧の少数民族であるサーミの議会を参考にすると良いといった話をきいたり、オーストラリアへ御遺骨を引き取りに行った際も、オーストラリアがいかに進んでいるかについて話を聞いたりしたこともあり、こうした発想につながっています。ぜひ現状のネットワークの中にもう1つ増やしていただき、世界的に情報を共有していくような団体にしたいと考えています。

結城委員：考え方の根本にあるのは、海外でみられる先住民の議会が欲しいということです。しかし、この国の法律では、少数で議会を持ち、それが発言権を持つにはまだまだ遠いと思っています。また、私たちにとっての一番の弱点は「誰がアイヌか」といつも問われることです。過去には、学者からですらアイヌがまとまらないといった意見がありました。せっかくアイヌに携わる機関があるのだから、年に1回程度は、それぞれが抱えている問題や希望を話す場所をつくり、アイヌ文化に携わる人たちの代表的な意見を作る場所ができれば良いと考えています。議会までいくには果てしなく遠いですが、噂レベルで物事を進めてしまうことなどを解消するためにも、そうした場がこれから必要になっていくと考えています。

また札幌アイヌ協会が関わっているサッポロピリカコタン(札幌市アイヌ文化交流センター)では、ワークショップなどを行うことで入場者数も増えてきており、かつてのような閑散としたイメージが少なくなってきました。これまでの議論を聞いて、ピリカコタンと北海道博物館とは連携していなかったなと思いました。

ピリカコタンでは、古いものを収蔵・展示しているわけではなく、触れるモノが多く、札幌アイヌ協会にいる現在のアイヌが制作したモノを中心に展示しています。しかし現代アイヌも含めて、職員たちもあまり自信がなく進めている現状です。例えば、これからリニューアルしてアイヌ語クイズなどもつくっていきますが、どうしても『萱野茂のアイヌ語辞典』から引用するといったことになってしまっています。せっかくなのでオリジナルを制作していきたいのですが、そのような際に、ピリカコタンの展示に関してのヒントを北海道博物館に探しにくるというつながりもできるかもしれません。また、同じ札幌市内の施設なので難しいかもしれませんが、北海道博物館で面白い展示があった時に、ピリカコタンでも特別展として巡回することで集客を図っていくこともできるかもしれません。せっかく同じ札幌にいるのでぜひ連携していただきたいと思います。

議題（3）令和6年度アイヌ民族文化研究センター事業経過報告（4～11月）

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：事務局から令和6年度のアイヌ民族文化研究センター事業の実施状況について、「資料3 令和6年度 アイヌ民族文化研究センター事業経過報告（4～11月）」を用いて報告。

また、北海道博物館が保管するアイヌの方々の御遺骨の出土地域への返還希望の申請・申し入れの状況について報告

（質疑応答、意見等なし）

議題（４）「新たな時代に対応する北海道立総合博物館のあり方について（答申策定に向けた協議の経過について）」

事務局（小野寺主幹）：事務局から諮問事項に対する答申の策定に向けた協議状況を、「資料４ 北海道立総合博物館協議会への諮問事項について（経過）」を用いて報告。

- ・今後の北海道博物館の更なる活用を図るとともに博物館を取り巻く新たな諸課題も踏まえた「あり方」について諮問を行っており、最終答申は来年３月にいただく予定。
- ・親会である北海道立総合博物館協議会で、答申に向けて「基本的機能の充実」「求められる役割」「地域との信頼関係の構築」「運営基盤強化」の４つのポイントを中心に議論してきた。
- ・配付資料の２ページ目以降は、協議会での意見をまとめている。

（質疑応答、意見等なし）

議題（５）北海道博物館 第３期中期目標・計画（素案）について（アイヌ民族文化研究センター事業を中心に）

事務局（会田学芸主幹）：事務局から来年度から５年間の「第３期中期目標・計画」の策定にむけた考え方について、「資料５ 北海道博物館第３期中期目標・計画（素案）」をもとに説明。また、「資料５」について、パブリックコメントとして道民からの意見を募集している（１２月２５日まで）旨を紹介。「１３ アイヌ民族文化研究センターの事業」について特に御意見をいただきたい。

結城委員：先日、琴似屯田の関係団体から講演依頼がありました。それを受けることで父を裏切っているのではないかという考えも浮かんできたのですが、話を聞きに行ってみました。屯田兵や開拓と侵略という構図や、アイヌと近代から現代という中で意識するところではありますが、琴似神社の宮司さんも含めて、若い世代の方々が町おこしも見据えて、アイヌのことを説明してほしいという話でした。そうした話が来た際には、まさしく北海道博物館にきて勉強すれば良いのかと思いました。私自身も、まず屯田兵がどのような目的で北海道に来たのかについてインターネットで調べ、さらに北海道博物館の中にある辛い状況を示す資料などを見ることも大事なのだろうと考えました。

和人の若い世代の方が、アイヌ文化に対してそのように意識してくれる時代になったのだと感じます。そして、近代から現代のアイヌの様相や、そこに関わっている屯田兵など開拓の移住者たちの状況などが重なった歴史については、北海道博物館でしか表現できないかと思うので、ぜひやっていただきたいと思います。

藤岡委員：昨年初めてセミナーのかたちで「講演」をしました。それは、自分を見つめ直す機会にもなりますし、アイヌの普及につながることに思ったからです。

札幌で生まれ育った私ですが、母親や祖父母は鶴川や穂別というルーツがあります。私のルーツもそこにあるという感覚はありましたが、アイヌであることを２０代くらいまで知りませんでした。母親もそれを言わずに過ごしてきたのですが、母親はアイヌなのでアイヌの人びとと関わる機会はよくありました。札幌では女の人たちがコミュニティをつくり、そこで人びとが集まっています。例えば、かつては私も機動訓練の場などで、織布や木彫りを習ったりできていました。私は自分がアイヌであることは２０代まで知らなくて、刺繍ができるからコミュニティに入り、アイヌの文化というよりは「刺繍」を学んでいました。

アイヌであることを隠しながらコミュニティにいる人がいるのかということは考えてもみなかったのですが、札幌で生まれ育って、３０代後半ぐらいからアイヌ文化を学んできて、さらに現在、アイヌ協会の協会員で、アイヌ文化の発信や普及、啓発、継承、伝承をしていこうと

活動をしているのは私の他を探しても見られません。今、札幌で生まれ育った子どもたちがたくさんいて、私の世代までの間に20代30代の人たちがいるという状況で、札幌の文化を研究されている方から都会の先住民民族みたいな扱いで取材を受けたこともあります。現在は、そのような環境にいるのだと認識しています。

セミナーの参加者からの質問として、学校の先生から「子供たちにアイヌの存在やアイヌ文化をある程度伝えなければ、学校の生徒たちは、アイヌについての知識は『ゴールデンカムイ』などの漫画だけだったり、例えば、シャクシャインなどのわかりやすい言葉のみを学ぶだけでアイヌの歴史についての学習が終わったりする環境になっている」と言っていました。先生にはアイヌ文化を頑張って教えていただくようお願いしました。セミナーなどは札幌でも行っていますが、先生への教育として北海道博物館でアイヌの文化について直観的に理解したり、また、アイヌ以外のものに関しても有形無形の文化財に触れたりすることで、そうしたことに思いを寄せていったり発信したりすることにつながっていくと思います。まずは大切な資料を残していけるよう提唱していかなければならないと考えています。

また、国の重要無形民俗文化財である「アイヌ古式舞踊」の保持団体として指定を受けた「保存会」を大切に、繋がりを持っていただき、コミュニケーションを図ることによって、普及活動につなげていくことができると考えています。踊りや刺繍などは私も行っており、あとは会社員としてアイヌ紋様をデザインして商売もしていますが、そのようにアイヌが自立して活動することを考えているので、アイヌと直接コミュニケーションが図れるようなイベントを検討するにあたって「保存会」を重視していただきたいと思います。なぜかという、札幌市では、「保存会」でなくともアイヌの踊りを踊れば全て古式舞踊という扱いになってしまう状況であります。一方で、私たちは子どもたちを小さい時から儀式に参加させ、踊りを一緒に踊っています。儀式に出るには民族衣装を作らなければならず、親たちが一緒になってそれを作ったり、つくれない親に対しては「保存会」の会長が縫ってあげたりもします。さらに、儀式では料理を作らなければならず、また料理を作るということは供物を作らなければいけません。このように、儀式には総合的にアイヌ文化が詰まっているものだと思います。ですので、単に踊りを踊る任意団体と「保存会」は全く違うものだと考えています。

私自身「保存会」に救われたところがあったので、北海道博物館ももう少し「保存会」と関わっていただいて、道内の「保存会」とのコミュニケーションを図っていただければと思います。そして、直接アイヌ、つまり人間に触れてもらう機会をつくっていければと考えます。まずは、北海道博物館がアイヌともう少し近くなってもらうことで、アイヌも北海道博物館に興味を持つという環境をつくっていただければと思います。あとはエカシやフチとの座談会みたいなことも、面白い話がたくさんでできます。まずは博物館の職員と行ってみることからでもよいと思います。

アイヌと北海道博物館への来館者との接点をとっていただければ、私たちの普及活動にもなっていくのではないかと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：当館は総合博物館ですので、アイヌ文化関係の事業を行っている、例えば「ウポポイのようなアイヌに特化した施設との違いは何だ」とか、「あえて総合博物館にアイヌ文化のセクションを入れる意味は何だ」と問われることがあります。アイヌ民族だけがどこかで離れてくらしているわけではなく、現在の北海道の中に、北海道民の1人としてくらしている、北海道の自然・歴史・文化を総合的に取り上げる博物館の中に、当たり前アイヌの歴史や文化があるという状態を、展示や事業として整備していくことが現代的な課題として大切なのだと考えています。

結城委員からお話のあった屯田兵で例えると、石原真衣さんが著書で書いているとおり、母方は平取のアイヌで父方は会津藩の屯田兵ということで、そういう方たちの民族的なアイデンティティーは、何かひとつで語れるものではありません。しかし、その中で自分の民族的な意

識をどう思っているのかといった考えはあります。屯田兵についても、当館の中の展示や資料でも、明らかに屯田兵が入植したことによって、そこにくらすアイヌが強制的に移転させられている事例が出てきます。また、旭川屯田の記録では、入植したときは隣にアイヌの集落があったが、ある時期になくなっていったという記載がみられます。その屯田兵の認識としては、アイヌがいなくなったということだけけれど、人為的な理由でそうなった可能性もあります。ただ、例えば江別屯田の入植の記録を見ると、豊平川で船についた際、船から陸上に入植者を抱え上げてくれたのは、濃いひげを生やした人だったといった記載があります。それはおそらく対雁あたりにいたアイヌだったと考えられ、屯田兵が初めて江別に入ったときに迎えてくれたのだらうという回想もありました。そうすると、結城委員の話にあったように、ひとつの話でくくるのではなく、それぞれがそれぞれなりに相手を思いやってくらしてきた歴史の上に、次の世代の人たちのくらしがあるということです。そうしたものが、調査を進めていくと出てくるだろうと思っており、そうした歴史は、和人でもアイヌでも共有していくものだと、博物館で展示や事業をつくっていければ良いと考えています。

そういう意味で、当館の総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」では、札幌生まれの小学生を主人公とした物語で始めています。藤岡委員のお話のとおり、ある時期までは自分のルーツは〇〇地方だと語ることで、そのアイヌの歴史や文化を語っていただけますが、世代を重ねていけば、自分は札幌生まれであり、自分の親も札幌生まれ、遠くまでさかのぼればいろいろあるのかもしれないけれど、ということになっていきます。藤岡委員の話から例えると、自分にとって穂別の景色はたまに行く場所のようなものでしかないという中で、どのように自分たちの歴史や文化を考えていくかという点で、50年前や100年前とまた違った感覚や考え方を持たざるをえないし、そういったものを逆に和人の側も意識していかなければいけないと思っています。また、アイヌといえば平取や阿寒ということではなく、札幌や、さらには東京という意識が必要になるので、そうしたことをどのように考えていくか、北海道博物館としても、北海道をどのような地域としてお伝えしていくかという上でのひとつのトレーニングだと考えています。

現在、展示改訂の取り組みをしていますが、アイヌ文化の展示ではない総合展示第3テーマの大正時代の「三等客車」を再現した展示において、その客車には20人ほどの乗客がいます。おそらく50年前に開拓記念館としてその展示を作った際には、その20人は全員和人を想定してつくられていたと考えられます。しかし、もしアメリカ合衆国で同様の展示をつくると、20人の乗客がいるのであれば、その中にいろいろな民族的出自の人が乗り合わせていることが分かる表現になっているだろうと考えます。つまり、肌の色も違うし、ずっとアメリカに住んでいる人、出稼ぎで移住してきた人なども考えられます。当館の三等客車でもおなじように、20人の乗客がいれば、その中にアイヌの人がいてもおかしくありません。乗客だけに限らず駅員かもしれないし、またアイヌだけでなく、大正時代であれば朝鮮半島やロシアからも人が入ってきています。そうした状況を当たり前に展示に取り入れ、北海道の自然・歴史・文化の展示の中で、北海道という地域ならではの民族的な多様性や社会の多様性をうまく伝えていくことによって、これが北海道だとポジティブに捉えていただけるようにできないか、そうした目標を持っておきたいと思っています。

藤岡委員の「保存会」に関するお話は、私自身もそのように考えております。これまでさまざまな任意で作られているサークルや団体が、それぞれの立場で新しいことを切り開いてきており、その中には20年以上の長期間にわたって活動している団体もあります。そうした点でそれぞれの任意の団体も重要な意味を持っていると思っていますし、「保存会」が国指定を受けるとということにも関わり、取り組まれてきている立場も大事だろうと思います。

現在検討していることをお話しします。例えば「保存会」の方々が過去何十年間にわたっていろいろな場所で公演された記録は、「保存会」には残っていないけれども、公演した相手先には残っていることがあります。最近、大阪にある阪急文化財団の「阪急文化アーカイブス」

の中に、宝塚歌劇団がかつて調査した日本の伝統芸能の記録があり、例えば北海道の伝統芸能として国立劇場などで行った公演を録画録音したものがあることを知りました。その中には、今から30年前の「保存会」の公演の録画もあります。その資料について、阪急文化財団に問い合わせると、「保存会」からの申請であれば、コピーできると言われました。アイヌ協会にも話をし、今年度から来年度にそこでコピー可能なものについては、それぞれの「保存会」に話をし、記録を取り寄せ、それぞれの「保存会」でお使いいただけるようにすると、「今は伝承されていないけどかつてはこうだった」ということが分かってくるかと思います。そのように、博物館として調査を進め、博物館の資料としても大事ですが、「保存会」で使った方がよいものがあればその仲立ちをするといった仕事もできるかと考えています。

そうしたことと関わり、博物館のさまざまな活動と言えば、「議題（４）」で事務局から説明した「第3期中期目標・計画」において、アイヌ文化だけでなく博物館全体の課題としてですが、「道民参加型博物館」があります。当館は、道民の方に博物館の事業に積極的に参加していただくことを博物館のひとつの使命として掲げています。アイヌの資料に限りませんが、例えば当館は多くのアイヌの着物や民具資料を所蔵しており、展示されていない収蔵庫にある資料を閲覧したいとなった場合には、書類手続きを踏んでいただくことになっています。それについて、道民参加型の事業として、博物館の資料を自分たちの文化継承や学習のために、古いものを見て、新しい複製を作っていくということを、当館の博物館活動の一環に位置づけさせていただくことなどを考えています。それによって、そうした複製のための閲覧や利用については、手続きを少し簡素にして、閲覧していただきやすくすることができるようになります。また、でき上がった成果をいろいろな場で活用していただけるようにするといったことに、多少なりとも博物館が関わっていくことも可能です。それらができれば、当館にとっては道民参加を進めることにもなりますし、実際にアイヌ文化の継承活動をされている方にとっては、資料閲覧の敷居を下げた状態にできるのではないかと考えています。そうしたことを「第3期中期目標・計画」の中に具体的に組み込んでいくことで、5年間のうちに少しずつ進めていくことを目標にしていきたいと考えています。

結城委員：最近大阪で仕事があり、その際に「アイヌ文化をどうやってアピールしたら良いですか」という質問が来ました。その際に答えたのが、アイヌの世界観についてです。アイヌはカムイと呼んでいるものを取ったり食べたりして、その魂を送るという考えを持っています。つまり、アイヌはリアルな厳しさとともにありながらも神話も持つという2つの世界を持ちながら生きた人びとと言えます。これは、北海道という大地の個性がないと成り立たないことだと思います。雪や寒さ、育つもの、そうした世界観がもっとわかりやすくなると良いないつも考えています。アイヌ文化は人間がつくった文化ですが、人間にプラスして自然の力がないとでき上がらなかったものです。豊かな北海道の自然観をアピールするためにも、また、守っていくためにも、そのようなアイヌが持っていた哲学、つまり食べたり採集したりするけれどそれらをすべて取り尽くさないという、自然と人間の関わりとしてのアイヌの世界観が、アイヌだけでなく和人にももっと発信されると良いと思っています。そうすると北海道の地名まで繋がっていったりもします。

かつて本の中で、版画で北海道の地図を描いてくれと言われたことあったのですが描けませんでした。地図として俯瞰で見るという感性がアイヌにはないのだと思いました。そこでは、ただやたらに川を描き、川が次のコタンにいく経路だったということは多分わかっていただけなかっただろうという経験をしています。また、地名でもそこで取れるものの特徴が分かりますし、例えば積丹なら「サク コタン」（夏・村）であり、なぜ夏に村を作るのだらうと思われるのですが、今も積丹には豊かな海産物があるという世界観まで見えると、もっとわかりやすく、アイヌ文化の土地の個性と一緒に生きるという姿が、もう少しクローズアップされるかと思っ

ております。

現在、アイヌ文化は注目を浴びているので、なおさらそこに疑問が残っているのではないかと考えています。それに加えて、先ほど話した近代から現代にかけての視点として、なぜ今のアイヌの人たちが、和人と同じ暮らしをしているのかというところも発信されると良いと思います。そうした発信は、アイヌにとってショックなことかもしれないし、和人にとってもまたショックなことかもしれませんが、それを一度乗り越えないといけません。アイヌは急に沸いて出てきたわけではなく、この土地の個性とともに生きた世界観を持ちながら、でも時代とともに変わりつつあったということはいまよく展示されると良いなと考えています。

白石委員：「13 アイヌ民族文化研究センターの事業」は、全体の中でも記載の分量が少なく、北海道博物館の中の一事業感が出てしまっています。おそらく第2期中期目標・計画を踏襲しているのでそうなるのかもしれませんが、章立てでもこれで良いのだろうかと考えています。つまり、北海道博物館の1部局の事業なのでしかたないのかもしれませんが、全体で13個あるうちの1つと見えてしまい、本来は、この「13」の記載の中にもアイヌ民族文化研究センターの事業としての調査研究や教育普及事業、情報発信等について記載されていても良いのではないかと思います。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：記載については御指摘のとおりですが、先ほどの道民参加型の話と同様に、他の項目に含まれているものについては「13」には記載しないという形式になっています。一方で、「13」にあまり記載がないからといってそれをやらなくて良いとは考えておりません。まだお話ししていないところでは、北海道がカスタマーハラスメント条例を作りました。これは博物館全体の課題でもあります。ヘイトスピーチなどについては、実際に博物館に対して向けられたり、展示室にいるお客様が他のお客様に聞こえるような声で話したりすることもあります。そうした点については、先日の「アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク」（愛称ブンカラ）研修会でもテーマで取り上げていただきましたが、アイヌ民族文化財団や北海道大学で、組織としてそのようなハラスメントを許さないことを示すガイドラインを作っている状況です。また、アイヌ民族文化財団が作成したガイドラインをアイヌ政策課の御厚意で道内の市町村にも共有していただいています。道として作成したカスタマーハラスメント条例などを踏まえつつ、博物館という文化施設として、どうすれば来館者に気持ちよく御利用いただけるかという観点からガイドラインを作成していくことになるだろうと考えています。それを「13」では書いていませんが、当館として取り組んでいくにあたって、アイヌ民族文化研究センターはこの立場ゆえの関わり方をしていくということになると考えています。

このように、それぞれの項目にもアイヌ民族文化研究センターの事業も含まれていると御理解いただきたく思います。

小川部会長：「13」のボリュームが少ないと思っていたので、白石委員に御指摘いただきありがとうございます。

私自身は、環境ビジネスを行っており、住宅を解体して、木の柱をチップにして牛の敷き藁として販売したり、コンクリートを破壊して砂利にしたりする事業を行っています。しかし、環境ビジネスといっても二酸化炭素が発生しているので矛盾を感じたりもしています。また、障がい者就労支援として、例えば廃棄するコンビニ弁当を養豚の餌にするために容器と中身に分別するといった仕事などをつくり、障がいのある方が自立して生きていけるような事業などにも挑戦しました。それ自体は現在停止していますが、自身の課題として仕事の中に環境や障がい者支援などを考えています。アイヌ文化の哲学の中にも、エコな部分や他人に対する思いやりなどの思想があるので、そうしたことを北海道博物館には伝えていただけたらと考えています。アイヌの持っているそうした哲学や思想は世界的に見てもレベルが高いものだと

思いますので、「第3期中期目標・計画」の5年間の取り組みとして考えていただければと思います。

議題（6）その他

結城委員：北海道の島文化については取り組んだことはありますか。利尻島や礼文島などの離島です。私は礼文島にいたころに、地層としてオホーツク文化などが重なってきており、最後にアイヌ文化が出てくるといったモノを見たことがあり、そこにアイヌの人たちがいたのか、今もいるけど名乗らないのか、と感じたことがあります。そうしたことも含めて、離島のアイヌ文化については、あまり研究が進められていないのかもしれないと考えています。

事務局（小川アイヌ民族文化研究センター長）：北海道開拓記念館の時代に、離島を特集して何年か継続して調査し、報告書も刊行したことがあります。その中で、アイヌについても取り上げられてはいるのですが、例えば利尻島では「江戸時代の記録にこのようにアイヌが出てきている」といった内容です。それももちろん大事ですが、藤岡委員の話のように、では今現在どうなのかということが大切ではないかと考えています。

先ほど少し取り上げましたが、当館の40歳以下の職員がチームを作って、アイヌ文化、歴史的建造物、生活文化、自然など、さまざまな分野の職員がそれぞれの立場で5年間奥尻島を調査したことがあります。その時、アイヌ文化の担当者が行ったのは、ひとつは島の子供たちが普段なかなかアイヌ文化に触れる機会がないので、学習の機会を持つための取り組みです。もう一方として、島の記録を調べると、奥尻島には江戸時代だけでなく明治時代の初期のころまでは、アイヌの人たちに関する記録が出てきています。あるいは島の人ではないけれど、著名な人としては、萱野茂さんの妻である萱野れい子さんは奥尻で生まれています。なぜ奥尻で生まれたかということ、当時の奥尻の測量にれい子さんの父である二谷善之助さんが測量技師として長期間滞在しており、妻も連れていったので、そこで生まれたということでした。そこから分かることはれい子さんが生まれたという事実だけではなく、昭和初期の北海道のさまざまな地域の営みの中に、アイヌの人が測量など、和人ではなかなか担えないような仕事をしていたということです。北海道の歴史や文化の成り立ちの中で、先住してきたアイヌの人たちが単に開拓によって被害を受けたということだけでなく、今の北海道を形づくることに参画してきていて、そうした中での人びとの歴史があることを伝えることが重要です。そうした成果を奥尻島の方々にお伝えすることで、奥尻の方々が奥尻について知っていくときの、「知る」の中身が少し膨らむだろうと言えます。奥尻島の後に離島を調査する計画はまだありませんが、離島だけでなく北海道の中で、地理的にも特徴的な地域や、なかなかまとまった形で調査されていない地域もあります。各地の博物館では1人2人しかいない学芸員が業務を全部行っているもので、なかなか手が回りません。そうしたところに、当館が道立の博物館として調査させていただくことによって、その地域についてのいろいろな情報を膨らませていくことができれば、北海道博物館にとっても得られるものがあるだろうと考えています。

結城委員：北海道全部を捉えるとアイヌの変化は多岐多様にわたっていきますが、島というのはコンパクトにできる部分があります。驚いた事例としては、礼文島ではアワビを送る儀礼があったそうです。アイヌがアワビを食べていたのか疑問だったのですが、北海道大学の加藤博文先生に伺うと、流通に関係しているのではないかとのことでした。アワビは本州で好まれ、それを交易品にすることで自分たちの生活ができるということに対してのカムイノミだったということのようです。つまり、「今」を支えているものに対してカムイを感じていたと思うと、面白い世界観だと感じます。そのように、北海道の島文化についていずれ調査をしていただければ面白そうだと思いました。